

A portrait of the pianist Ikuyo Nakamichi. She is shown from the chest up, turned slightly away from the camera but looking back over her shoulder. She has dark hair styled in an updo and is wearing a light-colored, possibly sequined, dress with a draped shawl. The background is dark and textured.

仲 道 郁 代

ピアノ・リサイタル

知の泉

The
Ikuyo
Nakamichi *Road*
to
2027

PROGRAM

ベートーヴェン
ピアノ・ソナタ第17番《テンペスト》
Op. 31-2 ニ短調

BEETHOVEN: Piano Sonata No. 17 in D Minor, Op. 31, No. 2, “Tempest”

第1楽章 Largo–Allegro

第2楽章 Adagio

第3楽章 Allegretto

ショパン
バラード第1番 Op. 23 ト短調

CHOPIN: Ballade No. 1 in G Minor, Op. 23

リスト
ダンテを読んで S. 161-7

LISZT: Après une lecture du Dante-Fantasia quasi sonata SI61 / RI0-7

ムソルグスキー
組曲《展覧会の絵》

MUSSORGSKY: Pictures at an Exhibition

プロムナード Promenade

第1曲 小人 Gnomus

プロムナード Promenade

第2曲 古城 Il vecchio castello

プロムナード Promenade

第3曲 テュイルリー ―遊んだあとの子供のけんか
Tuileries - Dispute d’enfants après jeux

第4曲 ブイドロ Bydlo

プロムナード Promenade

第5曲 卵の殻をつけたひなどりのバレエ
Balet nevylopivshikhsva ptentsov

第6曲 ザムエル・ゴルデンベルクとシュムイレ
“Samuel” Goldenberg und “Schmuyle”

プロムナード Promenade

第7曲 リモージュの市場 Limoges. Le marché

第8曲 カタコンベ ―ローマ時代の墓
Catacombae (Sepulcrum romanum)

死せる言葉をもって死者と共に
Con mortuis in lingua mortua

第9曲 鶏の足の上に建つ小屋 ―バーバ・ヤガー
Izbushka na kuryikh nozhkakh (Baba-Yaga)

第10曲 キエフの大きな門
Bogatyrskiy vorota (V stolnom gorode vo Kiyev)

仲道郁代 プログラムを語る

知の泉

人間の業と 再生への祈り



今回のプログラムは「知の泉」というタイトルですが、今、私の中に演奏のテーマがありまして、それは「人間の業と再生への祈り」というものです。

4人の作曲家がそれぞれインスパイアされた、叡智と示唆にあふれる物語や絵画、その中から何を読みとり、どんな思考を委ねて音にしたのか。私はそこから何を受け取り、お客様お一人お一人はそこに何を聴くのか。

私はこれらの曲は、昔の偉大な話や教訓ではなくて、今の私たちに語ることなのだということを強く感じています。例えばショパン。ショパンはポーランドの人で、ワルシャワ蜂起や革命といった当時のポーランドの状況が彼の作品に大きな影響を与えていました。それは今見聞きするウクライナの状況と、同じことなのではないかと思うのです。難民の方達のご様子と、ショパンが国を離れたこと、5000人ももの貴族が亡命してパリに逃れていたということ。遠い昔の悲しい話ではなく、ショパンの音の一つ一つの意味というものが今と重なっているのです。クラシックは昔の音楽なのではなく、今の時代にリアルに生きた言葉なのであり、メッセージなのだということ、そのリアリティが私の中で本当に増してきています。演奏家は、演奏するために、作品のスタイルやその時代の楽器、社会背景、作曲家の思想などいろいろなことを調べ、考えてその作品に向かうのですが、それは、作曲家がその作品に委ねた思いに寄り添

い、今に伝えるためであって、そのスタイルを再現するためだけではない。そのことを今改めて感じています。

村上春樹さんが、「音楽は戦争をやめさせることはできないけれども、戦争をやめようと思う気持ちを起こさせることができる」ということをおっしゃっていました。本当にその通りだと思います。コロナ禍になって、2020年の半年間演奏会がなくなりました。再び舞台に立つようになって、私にとって舞台とは神聖な場であり、演奏は祈りの行為であったことを強く意識しましたが、ここへきてその行為の持つ意味がより切実なものとなりました。演奏とは、人の思いを人へ伝えるためのものなのです。今度のコンサートは、音を出すことの意味、コンサートの意味、だから私は弾くということの覚悟が、より深まった中で演奏するコンサートになると思っています。

この「知の泉」のプログラムは5年も前に考えたものですが、奇しくも、最後はムソルグスキーの《展覧会の絵》で、《キエフの大きな門》で締めくくられます。さらに、秋のプログラム「前奏曲～永遠への兆し～」は、最後にラフマニノフの《鐘》が来ているのです。《キエフの大きな門》は鐘の音と人の祈りが聞こえてくる、そして秋には、ロシアの鐘が聞こえる。今の情勢と、このプログラムのリンクに、恐ろしいような思いを抱いています。今の世の中に、私がこの作品たちを通して語りたことが、とても強くなっています。

ベートーヴェン ピアノ・ソナタ第17番《テンペスト》 Op. 31-2

この曲には《テンペスト》という愛称がつけられています。なぜ《テンペスト》と言われているかという、ベートーヴェンの弟子がこの曲を解釈するのにはどうしたらいいかとたずねたところ、ベートーヴェンが「シェイクスピアの『テンペスト』を読め」と言ったという逸話から、そのように親しまれるようになりました。ベートーヴェンが亡くなった後に、彼の本棚にはシェイクスピアの作品が並んでいたことがわかりました。彼はシェイクスピアを愛読していたようです。ただ『テンペスト』がこの曲を書く前に読まれていたのかどうかは判明せず、この曲とシェイクスピアとの関係はないとする考え方もあります。

けれども演奏する立場からしますと、解釈のどんな小さな鍵、可能性からでも、そこから考えられることはないだろうかと探してみたくなるものです。

《テンペスト》を解釈する時に考えるべき大きなポイントは、この曲を書いた1802年にベートーヴェンが「ハイリゲンシュタットの遺書」を書いているということです。「ハイリゲンシュタットの遺書」には、耳の病が音楽家として致命的であると絶望し、命を断とうとまで追い詰められていることが書かれますが、しかし自分には芸術という、神から与えられた使命があり、そのために生きるのだという宣言ともなっているのがこの“遺書”です。また、ベートーヴェンの弟たちに対し、彼らがいかに悪かったかを書きつらねつつも弟たちを赦すと書かれていることも、注目すべき点です。

一方、シェイクスピアの『テンペスト』がどんな話かという、これもプロスペローという王様が、自分を貶めた弟たちを赦すという、赦しの物語です。その点でも「ハイリゲンシュタットの遺書」を書いた頃のベートーヴェンの心境は、プロスペローの想いに大いに共感できる場所があったのではないかと思います。

シェイクスピアの『テンペスト』に描かれる魔法の島にはエオリアンハーブが置かれていて、風が吹くとその島にハーブの音が鳴り響くとあります。そのエオリアンハーブというものが一体どう

いうものなのか。以前、ベートーヴェン研究家で作曲家の故・諸井誠先生とベートーヴェンのソナタ全曲をアナリーゼして演奏するというコンサートをしていた時に、シェイクスピアの時代のエオリアンハーブの設計図をもとに制作したことがありました。それは木の箱に弦が張っており、窓辺に置いておくと窓から風が入り込む際に弦が振動して音が出るというものでした。

《テンペスト》の第1楽章は、これから何が起きるか分からないような、もやの中のような分散和音で始まります。第1楽章の途中には、不思議な箇所があります。それはベートーヴェンが「ペダルを踏みっぱなしに」という指示を書いているところで、この通りに弾くと、響きが濁るのです。

実際に作ってみたエオリアンハーブの音は、この濁った音響と同じような響きとなりました。この曲の響きと、シェイクスピアの『テンペスト』の魔法の島の世界観とが、重なり合うのではないかと思います。

「ハイリゲンシュタットの遺書」には「私には使命がある」と書かれています。使命というのは自分だけを考えて出てくるものではなく、「私はこういうことができる。だから、しなければならない」と、第三者を前提にして考えるものです。ベートーヴェンの「ハイリゲンシュタットの遺書」以降の作品の中では、必ずそこに人に伝えたいメッセージがあるように思います。それを伝えたいから作品を書くのだという意味が、彼の中で大きくなっていったような気がしています。ではこの曲で何を伝えたいのか。遺書を書く苦しみがあった。与えられた運命があった。人間には何らかの罪がある、業がある。けれども、それを乗り越えて、自分の使命を全うしなければならない。そして、赦していかなければならない。と考えたのではなかったかと思うのです。これを「モットー」としてこの曲を見ていくこともできるのではと考えています。

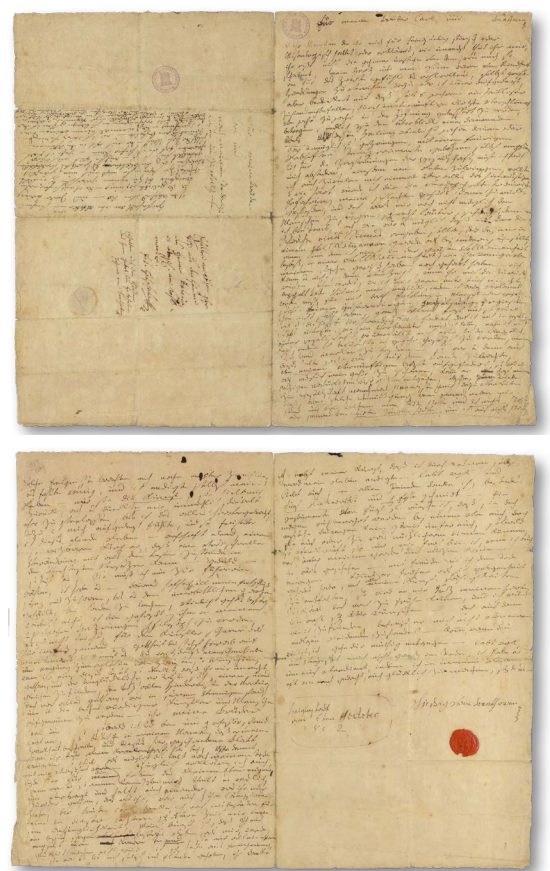
第1楽章は、冒頭から不安をあおるような、激しさを感じさせるような動きで始まり何かの予感を感じさせます。そこから、左手で鳴らされる強い力の運命的なものと、その力に対し助けくださいと懇願するような右手、その対話が描かれます。

第2楽章は問いかけです。この時期以後のベートーヴェンのソナタの第2楽章では、生き方や人

生への問い、人間はこの苦しみの中からどのような方向に進んでいったらよいのだろうかといった、神や天に対しての問いかけが多くなるように思いますが、この第2楽章も同様で、生き方や人生への問いかけの第2楽章となっています。

第3楽章では、「それでも、人は生きていかなければならない」と、悲しみや罪や運命を背負いながらも歩いていく悲哀、再生への道のりをゆく様が表現されていきます。冒頭の繰り返しの音型はあたかも「どうしたらいいんだ」「なぜなのだ」と自問自答しているかのようです。しかしそれでも歩き続けていこうという、再生への足取りが描かれています。

人間の業と運命、赦しと再生、そして神から与えられた使命。これがこのソナタで語られることなのではないかと考えています。



「ハイリゲンシュタットの遺書」。1802年の夏、ウィーンの郊外ハイリゲンシュタットで半年を過ごしたベートーヴェンは、弟たちに宛ててこの「遺書」を書いた。日付は10月6日と10日となっている。

ショパン バラード第1番 Op. 23

ショパンの《バラード》第1番には、ショパンがそのイメージを得たお話があると言われています。それは、ポーランドの詩人・アダム・ミツキエヴィチの叙事詩で、2つの国の戦争とそこに生きる一人の青年の壮大な物語です。他国に侵略され、自分たちの国がなかった時代のショパン、20歳の時に故郷を離れて異国の地に行き、以後二度と戻ることのなかったその青年ショパンの想いと、この物語の中の若者の想いというのは、大いに共鳴するところがあったのではないかと考えています。

冒頭から音の叙事詩の世界観が提示されます。ショパンは自分の作品を文学的に語ることを嫌っていました。決して物語を時系列的に表現しようと思っているわけではなく、この物語から受け取れる空気感、そして自分の人生に感じる想いを、純粋に音で表そうとしたのではないかと思います。

そして、純粋な音による物語は、静かに紡がれていきます。そこにある音の連なりから受ける、深い悲しみ、やるせなさ、自分の存在が定着していないというような感覚。今まさにウクライナの方たちが抱いている悲しみと、憤り、それはいかほどのものであるか。計り知れないそういった想いが、ショパンのこの静かな物言いの音楽の中には込められている。想いの深さというものがリアルに感じられます。

途中には、懐かしい故郷を思い出しているかのような瞬間も訪れます。このテーマは語り口を変えて出てきますが、本来はそこに自分がいて、そこにあるということ、その想いを享受したいのに、できないという寂しさ、切なさというものを、幾たびも感じさせられます。

そうして「バラード」という物語が紡がれていった最後の瞬間。終わりにおとずれるクライマックスで激しく気持ちが高ぶった、その最後の最後の部分で、静かに鳴らされる、「ターンタタン」というリズムがあります。

このリズムは、例えばベートーヴェンの《月光ソナタ》の第1楽章にもできますが、神の歩み、もしくは、葬列を表すリズムとも言われているものです。ショパン《葬送行進曲》でも使われています。そのリズムが、この《バラード》第1番の

最後に、出てきているのです。葬列か、神の歩みか、もしくは神から受ける言葉なのか。最後に2度繰り返して鳴らされるこの響きの、なんと悲劇的なことかと思えます。この音型と音の持つ重みというものを、今とても強く感じています。

祖国への想い、運命に打ちひしがれるショパンや、ショパンと故郷を共にする人たちへの想い、そこから再生していきたいという願いや祈りがあり、けれども、それはかなわないということへの強く深い悲しみの曲であると、私は思っています。



ワルシャワに建てられたアダム・ミツキエヴィチの像。このポーランドの国民的詩人の祖国愛あふれる詩に、ショパンは強い共感を持っていた。

リスト ダンテを読んで S. 161-7

ダンテの『神曲』というのは長大な物語です。ダンテがある時、黄泉の国を旅します。その黄泉の国というのは、地獄、煉獄、そして天国があって、それをまわっていくというものです。それぞれの場所には、歴史上の名だたる人物たちがいて、生きていた頃の行いによって、そこで受ける罰があります。地獄はそれはそれは恐ろしいところで、煉獄もキリスト教でいう「七つの大罪」で、7つの人間の欲から生まれる罪、自分が犯したその罪を償います。その上に天国の世界があり、天国の中で最も高いところが神に近い場所です。

このダンテの物語の中で、共感したところがあります。それは最終的に「愛」がテーマになっていくところですが。愛は善ももたらすが、悪ももたらすものである。自然と湧き上がってくる愛もあれば、条件を持った愛もあって、愛が足りなくて怠惰になる者もいれば、人を幸せにしない愛にとらわれて相手を傷つけたり恨みや妬みを生むこともある。けれども、天上界に行った時に最後に私たちが見るのは、大きな光の輪の中に愛が満ちあふれているという世界なのです。その天国のフィ

ナーレで、光は愛であるという純粋な至高の世界に上っていきます。

リストは、この「愛」ということをテーマに、この曲を描きたかったのではないかと思います。

この曲の冒頭の部分は、運命を下された瞬間のようです。自分の人生が終わった時、地獄に行くのか、煉獄に行くのか、自分はどのようなのかということ突きつけられるかのような始まりです。そして地獄なのか煉獄なのか、そこを旅していきます。曲の中には、さまざまな苦しみや葛藤を得ながらも、途中で光り輝く部分や、神からの啓示であるような部分も織り込まれて出てきます。

ダンテの『神曲』では、天上の世界で、ベアトリーチェという女性が現れます。ダンテが恋焦がれ、若くして亡くなった後もプラトニックな愛を抱き続けた女性が、ダンテの前に現れて「あなたは生きている間、もっと正しく歩んでください」と示していきます。曲の最後には、ベアトリーチェや天使を思わせる、光と愛の響きの世界が出てきます。

この曲で作曲者リスト自身はどのようなスタンスにいるか。リストは『神曲』のストーリーに入り込んだり、ダンテに共感したりするのではなく、物語を俯瞰して見ているように私には思えます。この『神曲』の世界から汲み取れること、人にはさまざまな罪や業や、乗り越えていかなければならない運命があるけれども、その上には必ず、光と愛の世界があるということ、その中に私たちはいるのだということを、リストはこの曲を通して指し示している、そんな曲だと思っています。



ギュスターヴ・ドレによる『神曲』『天国篇』の挿絵。ダンテとベアトリーチェが天国のフィナーレ「至高天」を見つめる。

ムソルグスキー 組曲《展覧会の絵》

《展覧会の絵》というと、ラヴェル編曲のオーケストラ版の、華やかで色彩豊かなイメージをもつ方も多いと思います。でも今回初めて作品に取り組んで、この曲をよく見てみると、全く印象が違っていました。これは恐ろしい曲だと思ふようになりました。

まず《プロムナード》。散歩や散歩道という意味のこの《プロムナード》は、子供の頃は、展覧会で絵を見ながら歩いている様子を表すと習ったように思います。しかし不思議なのが、4分の5拍子と4分の6拍子が交互に入れ替わるということです。これはロシアの民謡からきているとも言われますが、「散歩」なのに、5拍と6拍で歩いていくのです。何かを考えながら歩くのか、すっきりしません。この《プロムナード》は何度か出てきますが、出てくるたびに、調性が変わっていきます。またはじめはソロで出て、それからハーモニーを伴うという形は、教会の賛美歌のあり方と同じです。ここにも意味が感じられます。そのように変容しながら、最後に《死せる言葉をもって死者と共に》と題された部分で、この《プロムナード》の旋律が現れるのです。

《展覧会の絵》という作品は、ムソルグスキーの友人であった画家・建築家のハルトマンという人が若くして突然亡くなってしまい、彼の遺作展から触発されて作られたと言われています。死者となったハルトマンのことを想い、非常に短い期間で一氣に書き上げたのがこの曲です。

教会の歌と重なるような《プロムナード》が《死せる言葉をもって死者と共に》となっていくところに、一つ大きな意味があると私は思っています。割り切れない想いを抱えて歩いていく、それは教会での歌と重なり、最後は「死」へとつながっていく。その過程の折々に、ハルトマンが遺した絵のタイトルの曲が現れるのです。

とすると、ムソルグスキーが死者ハルトマンの人生を、それらの絵によって振り返り、祈りながら歩いているというのがこの《プロムナード》なのかもしれない。ハルトマンは、それらの絵を通して自分の人生と行いを思い返しながらかみ、最後には、壮大に鐘が鳴り響いて祈りの歌が聞こえる《キエフの大きな門》へと到達していきます。ダンテの『神曲』に近い世界を私はこの《展覧会の絵》という曲にも感じています。

第1曲は《小人（グノム）》というタイトルがついています。絵は残っていませんが、この「グノム」というのはロシアの子供たちが民話の中で親しんでいる小人です。決して美しい精霊ではなく、とても奇妙な、怖いような、そんな小人です。

第2曲は《古城》というタイトルです。古い城の前に吟遊詩人が立つというハルトマンの絵からイメージされたと言われています。8分の6拍子の「ターンタタン・タンタンタン」のリズムが繰り返されます。これも暗くて悲しい曲です。

第4曲は《ブイドロ》というタイトルがついています。これは「牛車」や「牛の集団」と訳されますが、この言葉は実は「虐げられた人々」という意味をもっています。ショパンの《葬送行進曲》とも通じる非常に重く、苦しい響きです。何かに

抑えつけられ、どうしようもなく、あがくことを強いられている人々の姿、苦しみ、叫びというのが、この曲の中にあるのではないかと思います。

その後、第5曲《卵の殻をつけたひなどりのバレエ》や、ユダヤのお金持ちと貧しい者をテーマにした第6曲《ザムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ》（3連符の連打がまるで小銭の音でもあるようです）などが続き、第8曲《カタコンベ》となります。カタコンベとは、地下の墓場です。元になった絵には連なる頭蓋骨の壁が薄明かりの中に浮き上がっています。自筆譜の余白にも、「頭蓋骨が静かに光り始める」という印象的な言葉が書き込まれています。そして、《死せる言葉をもって死者と共に》へと連なっていきます。

友人の死を悼んで曲を作るという時に、ムソルグスキーはなぜ美しい想い出を紡ぐのではなく、こういった曲を並べて書いたのか。ハルトマンの死を悼むということと同時に、人が生きて死んだ時に、その人の人生、その社会のさまざまなにおける罪や、抗えない業というものがそこにあるということ、ムソルグスキーはまざまざと感じたのではないか。「生きるとは、かくも苦しく、辛いことである」ということが、これらの曲の中にあるのではないか、そう思えてなりません。

ダンテの『神曲』の煉獄の世界には「七つの罪」がありました。そのいくつか、ここでも表れているのかもしれないと思います。一見明るい《テュイルリー》（第3曲）や《リモージュの市場》（第7曲）も、人々の賑わいや喧騒というのは、この世の中には確かにあることで、その中で人は生きていともいえます。市場の賑わいのすぐ後に《カタコンベ》がきているのも象徴的です。生の

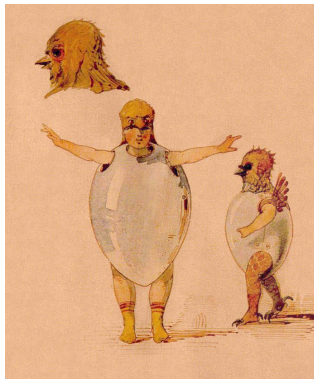
営みのすぐ隣には、死の世界がある。その《カタコンベ》では光、それもしゃれこうべの光があり、その後に《死せる言葉をもって死者と共に》となる。ここが、この曲で一番言いたかったところなのではないかと思います。「死」ということです。

第9曲《鶏の足の上に建つ小屋》は、ハルトマンの絵を見るととても奇妙な建物が描かれています。これはロシアのお伽噺に登場する魔女バーバ・ヤガーの小屋です。《キエフの大きな門》の直前に置かれたこの曲。天へ連なる門の門前には、魔女なのか、魔王なのか、悪魔的な門番が立ち、裁きを受けて門をくぐるということでしょうか。

そして第10曲《キエフの大きな門》へと、到達します。門をくぐっていく先には、鐘が鳴り響き、祈りの歌が聞こえてきます。鐘の響きが大きくなっていき、最後は、門の中の鐘と、おそらく天の鐘と、全てが鳴り響くという世界です。その響きは、あのダンテの『神曲』の最後、天の世界の光が輪になって大きく広がっていくその世界と、私はつながっているような気がしてなりません。《キエフの大きな門》をくぐり、そこから死者は天の世界に入っていくのだという、その物語を描いたのが、このムソルグスキーの《展覧会の絵》だと思うのです。これもテーマは、死者となったハルトマン、生きているムソルグスキー、そしてこの世に生きている人間の業ではないかと思っています。背負わなくてはならない罪と、そこらに天の世界へと歩いていくのかという「再生への願いと祈り」が、このムソルグスキーの《展覧会の絵》の中には描かれているのではないか。そう思って、私は今回、演奏をしようと思っています。

ムソルグスキーが
触発されたとされる
ハルトマンの作品

第5曲 卵の殻をつけたひなどりのバレエ



バレエ《トリフィ》のための
衣装デザイン

第6曲 ザムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ

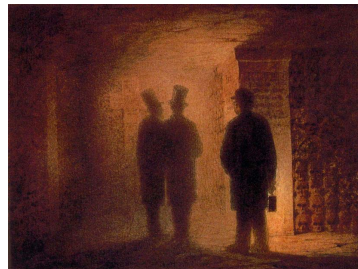


富めるユダヤ人

貧しきユダヤ人

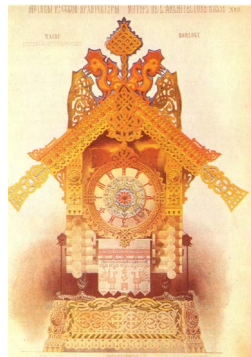


第8曲 カタコンベ——ローマ時代の墓



パリのカタコンベ

第9曲 鶏の足の上に建つ小屋——バーバ・ヤガー



鶏の二本足の上にバーバ・ヤガーの小屋が建つ時計の
デザイン画

第10曲 キエフの大きな門



キエフ（キーウ）に再建される予定だった大門の設計図

The Road to 2027

仲道郁代 The Road to 2027 リサイタル・シリーズ

2018 パッションと理性

モーツァルト：ピアノ・ソナタ K.310
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ
第23番「熱情」Op.57
ブラームス：ピアノ・ソナタ
第3番 Op.5

2019 悲哀の力

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ
第8番「悲愴」Op.13
ブラームス：8つのピアノ小品
Op.76
シューベルト：ピアノ・ソナタ
第19番 D958

2020 (2028年に延期) 音楽における十字架

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第22番
Op.54
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第21番
「ワルトシュタイン」Op.53
ショパン：2つのノクターン Op.48
シューマン：ピアノ・ソナタ第3番
Op.14

2021 幻想曲の系譜 ～心が求めてやまぬもの～

モーツァルト：幻想曲 K.475
シューマン：幻想曲 Op.17
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第28番
Op.101
シューベルト：さすらい人幻想曲 D760 Op.15

ダイジェスト
映像はこちら



思索するピアニスト NAKAMICHI
仲道郁代のベートーヴェン演奏が進化・
深化し続けている。それはまさに音楽
修辭学の実践だ。バロックの音形論とか情緒論
といった厳格な理論ではなく、むしろ詩学でい
うトポスの探索だ。どんな小さな音形や主題に
も意味があり、特定の情念を喚起させるという
仲道の演奏姿勢がもたらすベートーヴェン解釈
が説得力をましている。シリーズ各回につけら
れたテーマそのものがすでに一つのトポスと
なっている。

平野昭（音楽学者・評論家）

The Road to 2027」のプログラムを見て驚いた。毎回が
考え抜かれた組み立てで、しかも仲道さん自身によっ
てテーマが掲げられている。このテーマの下でこの曲
が演奏されるのなら、哲学をやってきた私にも語ってみたいこ
とが山ほどある！何しろベートーヴェンは、音で哲学しちやっ
た人なのだから。
かくして毎年私ども慶應義塾大学文学部に仲道さんをお招きし、
その年のテーマに合わせたお話を伺いながら一緒に議論させて
いただく至福の時をすごすこととなった。真摯にしてたゆまぬ
探求心に裏打ちされてますます奥行きと深みを増す仲道さんの
ベートーヴェンは、毎回新たな発見にうち満ちている。

斎藤慶典（哲学者・慶應義塾大学教授）

春のシリーズ

音楽を哲学的に探求するシリーズです。
ベートーヴェンのピアノ・ソナタを核に据え、
ベートーヴェン以前・以後の作品とともに
各回のテーマに迫ります。

2022 知の泉

本公演

ベートーヴェン：第17番「テンペスト」
Op.31-2
ショパン：バラード第1番 Op.23
リスト：ダンテを読んで S.161-7
ムソルグスキー：組曲「展覧会の絵」

2023 劇場の世界

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第19番
Op.49-1
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第20番
Op.49-2
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第18番
Op.31-3
シューマン：パピヨン Op.2
シューマン：謝肉祭 Op.9

2022年スケジュール

春のシリーズ 知の泉

- 2022年5月21日（土）
アクティシティ浜松 中ホール
- 2022年5月22日（日）
兵庫県立芸術文化センター
KOBELCO 大ホール
- 2022年5月29日（日）
サントリーホール



秋のシリーズ 前奏曲～永遠への兆し

- 2022年9月17日（土）
サントミューゼ 小ホール
- 2022年9月23日（金・祝）
長岡リリックホール
コンサートホール
- 2022年10月16日（日）
アクティシティ浜松 中ホール
- 2022年10月29日（土）
東京文化会館 小ホール



秋のシリーズ

2018 ショパン ～ブレイエルの響き～

ショパン：バラード第1番 Op.23
ショパン：バラード第2番 Op.38
ショパン：バラード第3番 Op.47
ショパン：バラード第4番 Op.52
ショパン：24の前奏曲 Op.28

2019 シューマンの夢

シューマン：アレグロ Op.8
シューマン：幻想小曲集 Op.12
シューマン：予言の鳥 Op.82-7
シューマン：ピアノ・ソナタ第1番 Op.11

2020 ドビュッシーの見たもの

ドビュッシー：前奏曲集 第1巻
ドビュッシー：映像 第1集
ドビュッシー：映像 第2集
ドビュッシー：喜びの島

ダイジェスト
映像はこちら



ライブ・レコーディングCD
『ドビュッシーの見たもの』



ピアノという楽器を味わい尽くすプログラムが並びます。
より限定された“親密な”空間で、ピアノの表現の多彩さ、
細やかさを味わっていただくシリーズです。

2021 幻想曲の模様 ～心のかけらの万華鏡～

ブラームス：2つのラプソディ Op.79 より 第1番
シューマン：クライスレリアーナ Op.16
ショパン：幻想曲 Op.49
スクリャービン：12のエチュード Op.8 より
第1番、第12番
スクリャービン：幻想曲 Op.28

令和3年度
文化庁芸術祭
「大賞」
受賞

次回
公演

2022 前奏曲 ～永遠への兆し～

ドビュッシー：前奏曲集 第2巻
ラフマニノフ：前奏曲集 Op.23 より
第2番、第5番、第7番
ラフマニノフ：前奏曲集 Op.32 より
第2番、第5番、第8番、第10番、第11番、
第12番
ラフマニノフ：前奏曲「鐘」Op.3-2

2023 ブラームスの想念

ブラームス：7つの幻想曲 Op.116
ブラームス：3つの間奏曲 Op.117
ブラームス：6つの小品 Op.118
ブラームス：4つの小品 Op.119
モーツァルト：フランスの歌
「ああ、お母さん聞いて」による12の変奏曲
（きらきら星変奏曲）K.265
シューマン：アベグ変奏曲 Op.1
ラフマニノフ：コレリリの主題による変奏曲 Op.42
ベートーヴェン：創作主題による32の変奏曲
WoO.80
ブラームス：ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ
Op.24



2021年「幻想曲の模様」東京文化会館



2020年「ドビュッシーの見たもの」
東京文化会館

IKUYO NAKAMICHI

ON RCA RED SEAL



ドビュッシーが心に投影した
理想の響きがここに。

最新盤

ドビュッシーの 見たもの

前奏曲集 I・映像 I/II・
喜びの島

【録音】2020年10月25日、東京文化会館小ホール(ライブ)
ハイブリッドディスク: SICC 19053 定価: ¥3,300(税込)

HYBRID

SUPER AUDIO CD



仲道が辿る、深遠かつ多様な
ベートーヴェンの音世界。

仲道郁代 ベートーヴェン 集成

ピアノ・ソナタ &
協奏曲全集

公演曲
収録

【録音】2003年～2006年
【完全生産限定】12CD+3ハイブリッドディスク+2DVD
17 DISC: SICC 39032～48 定価: ¥19,800(税込)

HYBRID

SUPER AUDIO CD

BSC02

DVD VIDEO



華麗な曲調の
陰に隠された
一作曲者自らの
魂の告白。

ショパン:ワルツ
(スタインウェイD-274使用)
CD: SICC 40084
定価: ¥1,760(税込)



仲道の
「音楽の故郷」、
シューマンへの
帰還。

シューマン:ファンタジー
(ロマンス/交響的練習曲/幻想曲)
ハイブリッドディスク: SICC 19008
定価: ¥3,300(税込)



プレイエールで聴く
インティメートな
ショパン。

永遠のショパン
CD+DVD:
SICC 9002～3
定価: ¥3,055(税込)

公演曲
収録



仲道の
ライフワーク、
ベートーヴェンの
ベスト盤。

ベスト・オブ・ベートーヴェンII
～月光・田園・テンペスト
CD: BVCC 34174
定価: ¥2,640(税込)

公演曲
収録

Sony Music Labels Inc.

YAMAHA
Make Waves



CFX

Yamaha Concert Grand Piano

私と、響き合う。

旬のピアニスト情報が満載

ピアニストラウンジ

検索

Pianist Lounge.

<https://jp.yamaha.com/sp/pianist-lounge/>

株式会社ヤマハミュージックジャパン



優れた製品は、常に最高のパフォーマンスを奏でる。

ユニオンツールはオフィシャルスポンサーとして、音楽活動を全面的に応援しています。

「優れた製品を供給し社会に貢献する」

ユニオンツールは、このフィロソフィーを昭和35年の創業から守り続けています。

人と技術と地球を結ぶ



ユニオン ツール株式会社

<http://www.uniontool.co.jp>

The Road to 2027

仲道郁代ピアノ・リサイタル「知の泉」

2022年5月29日(日) 開演 14:00 サントリーホール

主催：ジャパン・アーツ

特別協賛：  ユニオン ツール株式会社

協力：ソニー・ミュージックジャパンインターナショナル/ヤマハミュージックジャパン

発行：有限会社オフィス・ナカミチ

デザイン：三木和彦/株式会社アンバサンドワークス

編集：北川由子/有限会社オフィス・ナカミチ

表紙写真：ヒダキトモコ

制作：ジャパン・アーツ